

令和元年5月26日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02535

研究課題名(和文)近代芸術形成期における文学と絵画の協働に関する研究

研究課題名(英文) Research on collaborations between literature and painting in the age of modern art formation

研究代表者

吉田 典子 (Yoshida, Noriko)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：20201006

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1860年頃から1880年頃にかけてのフランス近代芸術形成期において、画家と文学者がいかに協働して急速に変化する近代社会における新しい芸術を探究したかを考察したものである。この時代は文学者が美術批評という新たなジャンルを牽引する役割を果たした。具体的には、近代詩の創始者ボードレールと近代絵画の第一人者であるマネの関係、および19世紀後半を代表する小説家ゾラと前述のマネの関係について新たな光をあてた。われわれはまた、ゾラとセザンヌの創造的關係についても考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では文学研究と美術史研究、および社会史研究という3つの学問分野を融合する試みを行った。ボードレールやゾラという作家と画家たちの関係は従来から指摘されてきたが、本研究では歴史的・社会史的な文脈を考慮した上で具体的な作品分析を行うことにより、これまで看過されてきた新たな関係性を見出した。また、ボードレールとゾラの関係はこれまでほとんど考察されなかったが、本研究では両者の美術批評の類似性と差異を分析することで、19世紀の美術批評の歴史に新たな系譜を見出した。また特にゾラとセザンヌの関係については、彼らの往復書簡集を翻訳出版し、従来の絶交説を見直して新たな研究への展望を開いた。

研究成果の概要(英文)：This study examines how painters and literary persons collaborated to explore new art in a rapidly changing modern society during the period of the French modern art formation from around 1860 to around 1880. During this period, literary writers played a role in driving a new genre of art criticism. We specifically focused on the relationship between Baudelaire, the founder of modern poetry, and Manet, who is the leading figure in modern painting, and the relationship between Zola, the late nineteenth-century novelist, and Manet. We also considered the creative relationship between Zola and Cezanne.

研究分野：フランス文学

キーワード：ボードレール ゾラ マネ セザンヌ 美術批評 文学と絵画

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 一般に近代美術批評言説の形成において、文学者が果たした役割は広く認められており、中でもボードレールの重要性は、阿部良雄の『群衆の中の芸術家—ボードレールと19世紀フランス絵画』(1975) によってすでに検討されている。しかし、阿部はボードレールとマネを扱った第4章を「現在の発見」と題したことに象徴的に現れているように、マネを「瞬間の美学」を求める印象派の先駆者と位置づけることで、往年の美術史学の枠内にとどまり、マネの絵画の歴史的・社会的・政治的な射程を捨象してしまっている。また、ボードレールによるマネの批評の継承者としてマラルメを取り上げ、ゾラをまったく無視しているのも問題である。

(2) 実際、一般にはゾラはボードレールを理解できず、評価しなかったと考えられているため(実際、特にその文学批評においてゾラはボードレールに批判的である)、両者の関係についてはこれまでほとんど考察されてこなかった。しかしいずれもマネを高く評価した点において、2人の美術批評には連続性が認められるのではないかと考えられる。

(3) また阿部の無視によってもわかるように、ゾラの美術批評はフランスでもこれまで必ずしも好意的な評価を受けてこなかった。ゾラは1860年代後半にマネや後の印象派の画家たちを果敢に擁護したことは広く認められているが、1879年にマネや印象派に苦言を呈したこと、1886年になって『制作』という小説でマネやセザンヌをモデルにしたと言われる主人公の画家を自殺させたこと等により、ゾラの美術批評家としての能力を疑問視する声は後を絶たない。しかし、70年代以降もマネとの親しい交流は続いており、ゾラの美術批評についての評価は見直しが必要である。

(4) これまで1886年の『制作』によって、セザンヌは中等学校以来の大親友であったゾラと絶交したというリウォルドの説が有力であったが、2013年になって1887年の日付を持つセザンヌの手紙が出現したことによって、その説は無効となった。そのため長い間にわたって、セザンヌ研究においてゾラとの関係は無視されてきたが、今後、両者の関係は根本的に見直される必要がある。

2. 研究の目的

(1) ボードレールとマネの関係について、書簡や友人の証言など、伝記的資料の再検討を行う。さらに、両者の親しい交友を背景に生まれた二人の作品を子細に検討することで、残された伝記的資料だけではわからない両者の創作上の繋がりを明らかにする。

(2) ゾラの美術批評言説におけるボードレールの美術批評からの影響を明らかにするとともに、両者の差異についても検討し、19世紀の美術批評史の見直しを図る。

(3) 1870年代以降のゾラの小説とマネの絵画の繋がりについては以前から考察を続けているが、今回は1880年のマネによる「現代生活 画廊」での個展に焦点を絞り、自然主義運動の頂点とも言える時期におけるマネの作品とゾラの関係について考察する。

(4) 中等学校以来のゾラとセザンヌの長い交流の推移について二人の書簡と初期作品を中心に検討し、共通の芸術観の形成と、文学作品と絵画作品のあいだに、いかなる照応が見出されるかについて検討する。

3. 研究の方法

(1) まず、ボードレールとマネの関係を証拠づける書簡、関連作品、友人の回想録、伝記などの資料を再検討し、年譜の形に整理する。またボードレールとマネが親しく交遊したことは書簡

や友人の証言などにより明らかであるが、詩人はその美術批評の中でマネについてはほとんど言及していないので、実際彼がマネをどのように考えていたかについては、彼がマネに捧げた散文詩「紐」を詳しく検討する必要がある。一方、マネの方では詩人をどのように見ていたかについて、群衆の中にボードレールの姿が描かれたタブロー《テュイルリーの音楽会》を分析する。

(2) ボードレールの美術批評とゾラの美術批評を精読し、両者の共通点と差異を検討する。また同時代のカスタニャリなど、他の美術批評家の言説についても検討し、ゾラがボードレールから継承したものを明らかにするとともに、近代美術批評の言説形成について考察する。ゾラ的美術批評についての国際シンポジウムを開催して、問題を共有する。

(3) 1880年4月にマネが「自然主義者の出版者」でありゾラの友人であったシャルパンティエの経営する「現代芸術 画廊」で開催した個展について、画廊の性質や出品作品を検討し、マネの絵画とゾラの小説および自然主義運動との関係について考察する。

(4) 2016年にはじめて出版されたセザンヌとゾラの往復書簡集と編者アンリ・ミトランによる解説を精読し、二人の交友と共通の芸術観の形成、友情の行方等について子細に検討する。双方の作品における影響関係を調べる。二人の芸術家の創造的関係についての国際シンポジウムを開催して、広く意見を交換する。

4. 研究成果

(1) 多くの二次文献や年譜で、ボードレールとマネが出会ったのは通常、1858-59年のこととされている。これはマネの親友アントナン・ブルーストの回想録『マネの思い出』の記述によるところが大きいと思われる。しかし両者の書簡などによれば、二人が親しく交際するようになったのは1862年以降であると考えた方がよい。1862年はマネの絵画が大きく変革した時期である。同年秋に制作された《テュイルリーの音楽会》にはボードレールの姿が描かれ、二人に共通する美学的・社会的関心が描き込まれている。腐蝕銅版画家協会（風俗のクロッキー）、日本版画への関心（色彩のジャポニスム）、喪服の女性のモチーフ（ナポレオン3世の対外戦争への批判）、ワーグナー賛美（帝政のお抱え音楽家であるオッフェンバックとの対比、崇高と滑稽）などについて考察し、1862年の時点における詩人と画家との創造的関係を明らかにした。この研究は、2017年に東京大学で開催されたボードレール没後 150 年記念のシンポジウムでフランス語で発表したものが、ボードレール研究の国際雑誌『ボードレール年鑑』*L'Année Baudelaire* に掲載されることになっている。

一方、ボードレールから見たマネについて、マネへの献辞がある散文詩「紐」は、これまで1859-60年の制作と考えられ、「現代生活の画家」で展開される芸術家像（都市の群衆の中を遊歩し、生の現実に快い驚きを発見する人）と結びつけられてきた。しかしそのテキストや制作年についての検討の結果、おそらく1862-64年初めの制作であり、散文詩最晩年の詩学（対象のひとつひとつから不快なモラルを引き出す人）と結びつけるのが適切であろう。また、散文詩「紐」は、マネのタブロー《老音楽師》（1862）、1864年のサロン出品作《キリストと天使たち》《闘牛のエピソード》と関連が深い。マネの絵画とボードレールの散文詩はまた、切断やアサンブラージュという手法においても共通性を持つ。さらに「紐」は芸術と金銭という近代の芸術家が直面した問題を、自身への皮肉を込めて提示している。この研究成果は、2016年に東京大学で行われた「アンヌ＝マリー・クリスタンに捧げるシンポジウム」で発表し、2018年春、水声社より出版された報告論集『テキストとイメージ』に掲載された。

以上2つの双方向的なテキスト分析ならびに図像分析により、1862年から64年にかけての二人の交友が、双方の作品創造に深く影響していることが確認された。

(2) ボードレールは1866年3月にベルギーで倒れ、以後知的活動は不能になる。ボードレールに代わって66年5月にマネ擁護の筆をとったのはゾラであった。ボードレールとゾラはマネを介して切れ目なく接続しているにもかかわらず、一般にゾラ研究においてボードレールとの関係は問題にされない。その理由は、ゾラがボードレールに対して明らかに冷淡であり、あまり高く評価しなかったからであるが、我々はゾラの文学批評の言説を詳しく分析した結果、自然主義のポレミックな批評家としてのゾラのスタンスは、基本的に反高踏派、反象徴主義であり、彼らが祭り上げたボードレールに対しても必然的に批判的な立場を取らざるを得なかったことがわかった。ゾラは心底ではボードレールに強く惹かれていたと思われ、ゾラは公言することはないものの、美術批評にもそのことが表れている。両者の共通点として、芸術家の「気質」や「個性」「独創性」の重視、芸術作品は芸術家による「自然」の翻訳であるとする考え方、「色彩」や「筆致」「細部の省略」といった技法の問題、アカデミズムへの反発がある。ゾラのマネ論における撞着語法の多用にもボードレールの影響が認められる。一方、両者の批評には歴然たる差異も認められる。ボードレールの美術批評において、問題の中心は「美」とは何かであるのに対し、ゾラが批評の中心に置くのは「生命」「気質」「真実」である。ボードレールは美学者でありダンディであるのに対し、ゾラはジャーナリストで社会学者である。ボードレールがシステムや流派に閉じこもることを好まず、新しいものに対してつねに開かれた感性を持っていたのに対し、ゾラは逆に理論を好み、自身の流派を作ることを好んだということである。しかしながら、実を言えばゾラは必ずしも自身のシステムに閉じこもっていた訳ではなく、必要な場合にはそれを逸脱したことも忘れてはならない。以上のように、近代的な美学はボードレールからゾラへ確かに継承されており、また両者は、美学的ないし社会学的という美術批評の2つの方向性を示すものであることがわかった。ゾラのアート批評については、2016年にリチャード・シフ教授を基調講演者として国際シンポジウムを開催し、上記の研究発表を行うと共に議論を深めた。

(3) ゾラとマネの関係は1860年代後半がピークであったとするのがこれまでの考え方であったが、我々はこれまで、1870年代になってから出版が始まるゾラの『ルーゴン＝マッカール叢書』の小説群とマネの絵画作品がさまざまな照応を示すことを明らかにしてきた。本研究では、1880年に「現代芸術 画廊」で開催されたマネの個展に着目し、ゾラとの関係を探った。この画廊は、「自然主義者たちの出版者」でありゾラと公私ともに親しいジョルジュ・シャルパンティエが、1879年4月10日に創刊した豪華な挿絵入り週刊新聞 現代生活 の刊行と同時に、その事務所開設した画廊である。この日付はマネがセーヌ県知事に宛てて、パリ市庁舎の市議会議場壁画の制作を申し出たのと同じであり、同年1月の完全な共和派政権の誕生と関わりがあると考えられる。またこの画廊は、サロンや印象派展よりももっと身近で手軽な形で、画家の作品と買い手であるブルジョワを結びつけるスペースとして構想されていた。マネは油彩10点、パステル15点を出品したが、パステルの最初に置かれたのは《エミール・ゾラ夫人の肖像》であり、マネの個展と共和派・自然主義陣営との繋がりが明らかに認められる。マネの出品作には、民衆的なカフェやブラスリーの情景、セミヌードや高級娼婦の肖像などゾラの『居酒屋』（1877）『ナナ』（1880）との関連を窺わせるものが多い。個展が開催された1880年4月は、まだ同年2月に刊行された『ナナ』のスクャンダルの余韻が残っており、『メダンの夕べ』の刊行と同時期でもあり、マネの個展はこうしたゾラのアートキャンペーンと同調していたと考えられる。

(4) 『制作』の翌年、1887年の日付を持つセザンヌの手紙の出現により、『制作』のせいではセザンヌがゾラと絶交したという定説は無効となった。セザンヌの研究者においても、ゾラとの関係を見直そうという動きがあり、2016年9月24日にポール・セザンヌ協会の主催で、エクサン=プロヴァンスの元セザンヌ家の別荘ジャズ・ド・ブファンを会場に、「ゾラと私・・・」と題されたコロックが開催された。このシンポジウムと軌を一にしてアンリ・ミトラン編によるセザンヌとゾラの初めての往復書簡集がガリマール書店から出版された。現在この書物を翻訳中であり、2019年には刊行予定である。アンリ・ミトランの解説によって明らかになったことは、ゾラがしばしば悪者扱いされ、一般的にアンチ・ゾラの言説が後を絶たないのは、ドレフュス事件によるところが大きいことである。周知のように「私は弾劾する……！」でドレフュス擁護の論陣を張ったゾラは、反対派から憎まれ、アカデミズムでの評価も遅れた。セザンヌとの関係で言えば、晩年にエクサンに隠遁したセザンヌから話を聞いてその思い出を書き残した人々、中でも画家のエミール・ベルナールと画商のヴォラールは反ドレフュス派であったために、ゾラについて悪意のこもった記述を残しているが、彼らの回想録はセザンヌ研究の基本文献となっているのである。セザンヌとゾラの創造的関係については、2018年12月に国際シンポジウムを開催し、フランス人を含むセザンヌ研究者4名、ゾラ研究者4名がそれぞれ研究発表を行い、全体討議で議論を深めた。

本研究代表者はセザンヌとゾラの『往復書簡集』を出発点として、最初期(1858-1860)の手紙に注目し、セザンヌにおける詩と絵画の問題に着目した。彼の詩の主題は、(1)自然、思い出、(2)女性への愛、(3)古代、幻想、(4)状況詩、(5)言葉遊びの出題、に分けることができ、特に初めの3つは後の絵画世界と共通している。セザンヌは言語に対する感覚が鋭敏で、さまざまな韻律を操ることができ、ゾラを詩作における好敵手と考えていた。ゾラもセザンヌが天才的な詩人であることを認め、手紙の中で彼の詩興の発露を「感覚」*sensation*という言葉で呼んでいる。セザンヌにとって詩と絵画は、もともと同じひとつの想像世界に属していた。セザンヌの手紙にはデッサンが添えられたものがあり、初期の2年間に限ると5点のデッサンがある。ここに認められるのは、「女性」「古代幻想」「死(頭蓋骨)」「水浴」「肖像」という5つのテーマで、韻文詩と同様、後のセザンヌの絵画世界を見事に予告している。最初のデッサンは《女性を愛すべし》という判じ絵であるが、ここにはすでにセザンヌの女性への愛や性に対するファンタズムが露になっている。次に問題にしたのは、セザンヌの女性イメージの代表作のひとつ《永遠の女性》(1877年頃)とゾラの小説『ナナ』の関係である。ゾラの『ナナ』の概要を構想する草稿には、《永遠の女性》とまったく同様のイメージがある。どちらが先かを決めることは不可能だが、セザンヌの構想に影響を与えた可能性のあるデッサンを指摘したい。1877年5月12日『パリ生活』誌に掲載されたアルベール・ロビダの《絵画展にて—1877年のモードと既制服》である。中央下にはマネの《ナナ》(1877)の戯画があり、中央上にはカロリュス・デュランによる高級娼婦《アリス・ド・ランサー》の肖像画が君臨している。マネの《ナナ》は、娘盛りに成長した魅力的なナナが登場する『居酒屋』(1877)第11章から想を得たと考えられる。しかし小説『ナナ』(1880)になると、彼女はあらゆる男性を破滅に導く神話的で怪物的な「宿命の女」としての姿を現す。ゾラにおけるこの変化を導いたのは、セザンヌとの対話であり、彼の《永遠の女性》だったのではないだろうか。またセザンヌの《永遠の女性》は、彼がマネの《オランピア》に対抗して《モデルヌ・オランピア》を制作したように、マネの《ナナ》に対抗して描いた作品ではないかと考えられる。この研究、およびシンポジウム全体の報告については、ポール・セザンヌ協会のホームページに掲載される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

Noriko Yoshida, « Baudelaire en 1862 vu par Manet : La Musique aux Tuileries et l'esthétique baudelairienne », *L'Année Baudelaire*, 査読有、No 23, 2019, à paraître.

Noriko Yoshida, « Cezanne et Zola : peinture et littérature ---Quelques réflexions à partir des premières lettres de Cézanne et de Zola », Société Paul Cezanne (<http://www.societe-cezanne.fr>), 査読有、2019, à paraître.

吉田典子、「ボードレール、マネ、ゾラの系譜をめぐって」、『仏文研究』、査読有、No 49、2018、pp.171-193.

吉田典子、「ボードレールとマネ関連資料」、『近代』、査読無、118号、2018、pp.27-58.

吉田典子、「1880年 現代生活 画廊におけるマネの個展(1)―画廊の特性と展示作品の同定」『近代』、査読無、第116号、神戸大学近代発行会、2017、pp.99-122.

吉田典子、「ゾラの美術批評とボードレール―隠された系譜」『国際文化学研究』、査読無、第48号、神戸大学国際文化学研究科紀要、2017年7月、247-274頁。

〔学会発表〕(計 6 件)

吉田典子、「セザンヌ/ゾラ: 絵画と文学」、日仏美術学会国際シンポジウム「セザンヌとゾラの創造的関係を再考する」、2018.

吉田典子、「ボードレール、マネ、ゾラの系譜をめぐって」京都大学フランス語フランス文学研究会総会特別講演、2018.

吉田典子、「Baudelaire en 1862 vu par Manet : *La Musique aux Tuileries et l'esthétique baudelairienne*」、国際シンポジウム「150年後のボードレール」、2017.

吉田典子、「ゾラの美術批評とボードレール―隠蔽された系譜」日仏美術学会国際シンポジウム「ゾラの美術批評を再考する」、2016.

吉田典子、「ボードレールとマネ―散文詩「紐」を中心に」、アンヌ＝マリー・クリスタンに捧げる国際シンポジウム「テキストとイメージ」、2016.

〔図書〕(計 3 件)

ポール・セザンヌ、エミール・ゾラ(アンリ・ミトラン編)、『往復書簡集(1858-1878)』、吉田典子、高橋愛訳、法政大学出版局、2019年刊行予定。

小林宣之編、角田拓朗、吉田典子、六人部昭典、吉川一義『明治初期洋画家の留学とフランスのジャポニスム』、水声社、2019、pp.99-141.

マリアンヌ・シモン＝及川編、吉田典子、千葉文夫、稲賀繁美、他7名『テキストとイメージ―アンヌ＝マリー・クリスタンへのオマージュ』、水声社、2018、pp.33-61.